

『平家物語』における平重盛

——武装しない武人として——

于 楽

はじめに

『平家物語』における平重盛は従来、作中で特別な役割を担う人物と考えられており、表現世界に秩序を構築する機能の重要性もしばしば問題にされてきた。

二〇世紀前葉に既に永積安明氏は、『平家物語』における重盛を「儒教的教訓の拡声器」と称し⁽¹⁾、石母田正氏も、重盛を作者の世界観、運命観を代弁する人物と捉え、その作中での言動に平家の没落の運命を予言する機能を見出している⁽²⁾。こうした指摘を踏まえて、山下宏明氏は、重盛の予言者としての機能がその子孫である平維盛、六代に受け継がれ、物語の構造を支えていることの重要性を論じている⁽³⁾。また、佐倉由泰氏は『平家物語』の重盛が不可侵の権威を持ち、表現世界の共同体化、秩序化に大きく寄与する人物である

ことを論じている⁽⁴⁾。

これらの先行研究でも述べられているように、作中の重盛の言動によって、王法、仏法を中心とする秩序の不可侵性が提示されるとともに、揺るがされた秩序が平家の滅亡によって回復することまでも予告されている。しかしながら、重盛の言動を通して浮かび上がる『平家物語』の秩序の内実については、まだ十分に踏み込んで検討されていないことが多い。そこで本稿では、重盛を描いた記述を取り上げ、その人物像を検討することで、『平家物語』において秩序の動揺と維持がいかに捉えられているか、また、どのような秩序が理想とされているかなど、作中の秩序の内実の解明を試みる。その検討の端緒として、先行研究ではあまり

検討されてこなかった、武装しないという、『平家物語』における重盛の特異なあり方に着目する。たとえば、鹿の谷事件をめぐる、平家打倒の企てに憤慨した清盛が後白河院の幽閉を計画するのを、重盛が阻止する場面では、平服を着用して登場する彼の姿に焦点が当てられている。

旗ざほ共ひきそばめく、馬の腹帯をかた
め、甲の緒をしめ、只今皆うったゝんずるけし
きどもなるに、小松殿、烏帽子直衣に大文の指
貫そばとって、ざやめき入給へば、事の外にぞ
見えられける（巻第二「教訓状」）

重盛の登場に先立ち、清盛をはじめ平家一門の人々が武装していることが記されており、そうした緊迫した状況のなかで、重盛の「烏帽子直衣に大文の指貫そばと」という武装しない姿が強調されている。重盛が後白河院と秩序を護る人物として、際立った活躍を見せるこの場面に、武装しないことを語る記述があることの意味は実に大きい。『平家物語』ではこの場面に限らず平服を着用して登場する重盛の姿が何度も強調されて描き出されているが、その表現は従来特に注目されず、道徳的な人物を記述する上での当然のこととして見過ごされてきたように思われる。しかし、武家平家の棟梁である平清盛の嫡子にして、左近衛大将

等の武官を歴任していた人物がこのように描かれるのは、決して自明なことではなく、むしろ『平家物語』の重盛像の本質を象徴的に示す固有の描き方だと考えられる。

こうした平服での登場を表す描写のくり返しは、重盛の、戦いを生業とする武人としての造型を阻むことになるが、そこにはいかなる意味があるのだろうか。それを検討することにより、『平家物語』における重盛という人物の本質に迫るとともに、どのような秩序が『平家物語』で提示されているかを明らかにしていく⁵⁾。なお、論述のなかで注目したり、引用したりする『平家物語』の記述は、特に断らない限り、覚一本の本文に拠ることとする。

一 『保元物語』『平治物語』における平重盛

『平家物語』の重盛像を考えるのに先立ち、同じく軍記物語の系譜に連なる『保元物語』『平治物語』の記述を取り上げ、両作品における重盛の描かれ方に注目する。それと照らし合わせることで、『平家物語』における重盛という人物の特質をより明確にすることができると考えてのことである。

物語の題材となる事件が起こった順序に従い、まず

『保元物語』の記述を検討する。『保元物語』では、後白河天皇と崇徳上皇との対立が原因となつて勃発した保元の乱の顛末が記されており、中巻からは、天皇方と上皇方の対立が激化して遂に戦鬪に及ぶことが語られている。戦いの火蓋が切られる白河殿夜討ちの場面では、平清盛が率いる軍勢の一員として重盛が登場する。この場面に関して注目すべきは、重盛の姿が、清盛の軍勢を迎撃する源為朝の超人的な戦いぶりと並べて描かれていることである。為朝は矢一つで清盛の郎等である伊藤五・六兄弟の二人を殺傷し、清盛をはじめとする平家の武士たちを驚愕させ圧倒するが、重盛は、味方の武士たちとは対照的に、為朝の驚異的な強弓を恐れず、為朝をよい敵と見て対戦しようとする（一類本『保元物語』中「白河殿へ義朝夜討ちニ寄せラルル事」。ここで、「為朝が矢ニ当テ見セン」と勇む重盛は、「若党失テ無益也」と述べてその行動を制する父清盛と対照的に、戦うこと自体を進んで求める人物として描き出されている。

このような描写は成立時期が早い一類本のものであるが、後出の諸本は、戦鬪に熱心な武人として重盛を描く志向をさらに強めている。たとえば、四類本では、為朝と戦うことを避けようとする清盛に対して「口惜事をも仰候物かな。合戦の庭に出て、敵の強け

ればとてしりぞかんにおめては、軍の勝負有べきやは。重盛にをひては、八郎が矢さきに一あたらんと思ひきりたり。爰にて戸をさらすべし」と反発する重盛の言葉が加えられている（四類本『保元物語』中「白河殿へ義朝夜討ちに寄せらるる事」。この言葉のとおり、重盛は戦いの場を重視し、勝負を決することに執着している。そこには、どれほどの強敵でも、それに向き合つて戦うべきだという武人としての自負が現れている。そのような言動の描出によって重盛の並々ならぬ剛胆さと旺盛な戦鬪意欲が浮き彫りにされ、戦うことを生業とする武人としての側面に焦点を当てる形で重盛の造型がなされている。それに続き、四類本では、重盛の武装と勇ましい言動も語られている。

赤地の錦の直垂に、逆面高の鎧、てうの丸のすそ金物しげううつたるが、白覆輪なるに、白星の甲、紅の母衣まつそうに吹せて、鶴毛なる馬に鈔懸地に金覆輪の鞍にぞ乗たりける。名乗けるは、「桓武天皇十二代の後胤、平將軍貞盛が末葉、刑部卿忠盛が孫、安芸守清盛嫡子、中務少輔重盛、生年十九歳、軍は是こそ初なれ、聞ぬる鎮西八郎懸出よや、見参せん」とたからかに名乗所を（後略）

いかにも大將軍にふさわしい戦場での晴れ姿が、一

一つの武具の詳述によって際立っている。最初に記述される「赤地の錦の直垂」は、重盛が平家の軍勢を統率する大将にふさわしいことを強く印象づけ、「白星の甲、紅の母衣」は、色彩の鮮やかさを添え、「金物しげう」つけられ「白覆輪」が施された鎧は華やかさを強調している。この豪華な武具の描写は、武将としての重盛の姿を際立たせ、その豪華さに見合うだけの、武人としての力量を具えていることを示唆している。さらに、それに続く名乗りには、由緒ある武門の継承者としての誇りが現れている。このように、重盛をめぐる記述のなかでも、武装の描写は、彼の武人としての属性をきわめて鮮烈に印象づけている。それは、初陣で早くも華々しい活躍を見せる武人として重盛を造型する上で、非常に効果的な表現である⁽⁶⁾。

次に『平治物語』における重盛の描かれ方に注目する。『平治物語』は、保元の乱で勝利を収めた後白河天皇の側近として実権を握る信西に、藤原信頼、源義朝が不満を覚えて政変を起こすという平治の乱の顛末を記している。平清盛が熊野参詣のために離京した隙をついて、信頼、義朝が政変を起こしたことが記述された後には、熊野参詣の途上にあった清盛と重盛の動静も語られる。同行する武士が少ないなかでこの差したった状況に直面した清盛は、一旦四国、九州に渡っ

て軍勢を集めてから都に戻ろうと述べるが、重盛は、平家を朝敵として討つことを命ずる宣旨・院宣が出されることを懸念し、一刻も早く帰京すべきだと主張する（一類本『平治物語』上「六波羅より紀州へ早馬を立てらるる事」）。さらに、四類本では、重盛は、清盛の考えに異議を唱える際に、院宣が出されることへの懸念を示すことに加えて、「今度無勢なりとも、懸向て即時に討死したらば、後代の名も然べしとおもふ」と述べている（四類本『平治物語』上「六波羅より紀州へ早馬を立てらるる事」）⁽⁷⁾。この言葉には、戦いの勝敗よりも、戦いを遂行することと、それによる名譽の保持を重んずる意識が現れている。このように、『平治物語』の重盛は、一門の運命の帰趨にかかわる重大な決定をする場面をはじめ、さまざまな状況において、戦う武人としてのあり方を全うしようとする姿が強調されている。

帰京した後の戦いで、源義朝らの軍勢を内裏からおびき出す作戦を立てて、それを実行する場面では、戦場における重盛の活躍が描写されている。まず、叔父の平頼盛、平教盛とともに「六波羅よりむかふ大將軍」の一人として名が挙げられた後に、重盛は、「今、年号も平治也、みやこも平安城なり、我等も平氏也。三事、相応して、なか軍に勝ざるべき」と全

軍を鼓舞している（一類本『平治物語』上「待賢門の軍の事」。まさに大將軍としてのすぐれた器量を強調する表現となっている。そして、これに続き、重盛の武装が語られる。

重盛、大宮面にひかへて、しばらく人馬の氣をやすめけり。赤地の錦の直垂に、櫛の匂ひの介に、蝶の裾金物をぞうちたりける。鶴毛なる馬のはなはだたくまじきが八寸あまりなるに、金覆輪の鞍をきてぞのりたりける。年廿三、馬居・事柄、軍のおきて、まことに平氏の正統、武勇の達者、あはれ大將軍かなとぞ見えし

先述の『保元物語』四類本の記述と同様に、ここでも「赤地の錦の直垂」をはじめ、重盛の武装が詳述されている。この華やかな武装によって、重盛は「まことに平氏の正統、武勇の達者、あはれ大將軍かな」と絶讃されている。

また、偽って敗れる作戦を実行する時にも、誇り高く戦おうとする重盛の言動が現れる。重盛は、「合戦は又、時宜による也。はつかの小勢にうちまけてひきしりぞく事、身にあたりて面目をうしなへり。いま一駆け懸て、その後こそ勅定のおもむきにまかせめ」と述べ、作戦とは言え、戦わずに逃走することを恥ずべき行動と捉えている。その言葉には、武人としての強い

自負と、それゆえの旺盛な戦闘意欲が現れている。あらかじめ定められた作戦においては、戦いに執着することは求められておらず、「勅定」に背くことにもなりかねないなかで、重盛の戦闘意欲は過剰なものと言わざるを得ない。この過剰さにこそ、すぐれた武人として重盛を描こうとする『平治物語』の表現の志向が端的に現れている。他にも一連の戦闘の場面に、重盛が源義平の追撃に遭って危機的な状況に陥った時に、郎等の与三左衛門尉、進藤左衛門尉が我が身を犠牲にして重盛を守ることが描かれているが、そこにも、郎等たちの心服を得ている、重盛のすぐれた武将としての資質が示されている。

これまで検討したように、重盛は『保元物語』『平治物語』の二作品において、どのような強敵、危機に遭っても恐れない剛気と、武人としての強い自負、さらには、過剰とも言うべき旺盛な戦闘意欲の持ち主として描かれている。こうした記述のなかで、重盛の武装の描写は、すぐれた武人という属性を最も直接に印象づけるものとして機能している。

なお、重盛のすぐれた武人としての姿はこれまでに取り上げた軍記物語の二作品に限らず、慈円が著した『愚管抄』にも見られる。

平氏ガ方ニハ左衛門佐重盛清盛嫡男・三河守頼

盛清盛舎弟、コノ二人コソ大將軍ノ誠ニタ、カイ

ハシタリケルハアリケレ。重盛ガ馬ヲイサセ

テ、堀河ノ材木ノ上ニ弓杖ツキテ立テ、ノリカ

ヘニノリケル、ユ、シク見ヘケリ。鎧ノ上ノ矢

ドモオリカケテ各六波羅ニ参レリケル（巻第

五）

これは、平治の乱の戦闘について語った記述である。重盛は、叔父の頼盛とともに、「誠ニタ、カイハシタリケル」「大將軍」と称され、戦士としての活躍が特筆されている。とりわけ、馬を射られても慌てず、状況を見極めて冷静に行動したことが「ユ、シク見ヘケリ」と称讃されている。この『愚管抄』の記述から、既に重盛が生きていた時に、彼をすぐれた武人と捉える見方があったものと考えられる。

二 平服を身にまとう『平家物語』の平重盛

『保元物語』『平治物語』では、重盛は武人としての側面に焦点が当てられており、その描かれ方は、『愚管抄』の記述から、存生当時の見方を反映したものと考えられる。そのことを踏まえると、『平家物語』が、晴れがましく武装して豪快に戦う重盛を描いても不思議

ではなく、むしろそのほうが自然である。ところが、重盛の武装した姿を、『平家物語』はあえて描こうとはしないのである。そのような『平家物語』の記述のあり方は巻第二「小教訓」の段においても顕著である。

小松の大臣は、其後遙に程へて、嫡子権亮少将維盛を車のしりに乗せつゝ、衛府四五人、隨身二三人召しぐして、兵一人も召しぐせられず、殊に大様げでおはしたり。入道をはじめ奉て、人々皆思はずげにぞ見給ひける。車よりおり給ふ処に、貞能つつと参つて、「などは程の御大事に、軍兵共をば召しぐせられ候はぬぞ」と申せば、「大事とは天下の大事をこそ言へ。かやうの私事を、大事と云様やある」との給へば、兵杖を帯したる者共も、皆そぞろいてぞ見えける。

これは、鹿の谷事件で平家打倒に参画した藤原成親が捕縛された時に、彼の助命のために重盛が父清盛の許に赴いた場面である。ここでの重盛の登場は、「兵一人も召しぐせられず」と、武力の行使をことさらに拒む姿勢を強調するなかで語られている。清盛の指揮に従っていた「兵杖を帯したる者共」と対置される形で、重盛は武装もしていない。さらに、腹心の家人である平貞能の「などは程の御大事に、軍兵共をば召しぐせられ候はぬぞ」という発言に対しては、平家をめ

ぐる緊迫した状況を「私事」と述べ、武装することと武力を行使することの不当を主張している。『保元物語』『平治物語』に見られた、武人としての自負を強く持ち、戦うことを最優先する重盛とはまさに対照的である。また、覚一本の記述には見られないが、延慶本などでは、この場面において重盛の服装をめぐる描写もなされている。

内大臣、此後イト久アリテ、烏帽子、直垂ニテ、子息ノ少将、車ノ尻ニノセテ、衛府四五人、隨身二三人計召具テ、ソレラモ皆布衣ニテ、物具シタル者一人モ具セズシテ、ノドヤカニテヲハシタリ。入道ヲ初奉リテ、人々思ハズニ思給ヘリ
(延慶本・巻第二「新大納言ヲ痛メ奉ル事」)

重盛は、烏帽子、直垂を着用していて、鎧を身につけず、しかも配下の「衛府」「隨身」までも皆「布衣」(狩衣)の姿で一切武装していないことが記されている。この記述によって、武装して集まった人々とは大きく異なった重盛の「ノドヤカ」な様子が強調されている。このように、諸本間の記述の相違はあるものの、武具を身につけず、戦おうとしない人物として重盛を登場させようとする点において、『平家物語』の記述は共通している。

このほか、先述のとおり、同じく鹿の谷事件で清盛

に対して後白河院の幽閉を思いとどまるよう諫める場面においても、重盛の武装していない姿に焦点が当てられている。

門前にて車よりおり、門の内へさし入って見給へば、入道腹巻を着給ふ上は、一門の卿相雲客數十人、おの／＼色々の直垂に、思ひ／＼の鎧着て、中門の廊に、二行に着座せられたり。其外諸国の受領、衛府・諸司などは縁に居こぼれ、庭にもひしとなみ居たり。旗さほ共ひきそばめ／＼、馬の腹巻をかため、甲の緒をしめ、只今皆うつた／＼んずるけしきどもなるに、小松殿、烏帽子直衣に大文の指貫そぼとって、ざやめき入給へば、事の外にぞ見えられける。入道ふし目になつて、「あはれ、例の内府が世をへうする様にふるまう。大に諫ばや」とこそ思はれけれども、さすが子ながらも、内には五戒をたもつて慈悲を先とし、外には五常をみだらず礼義をたゞしうし給ふ人なれば、あのだがたに、腹巻を着て向はむ事、おもばゆうはづかしうや思はれけむ、障子をすこし引立てて、素絹の衣を腹巻の上にあはて着に着給ひたりけるが、むないたの金物のすこしはづれて見えけるをかくさうど、頬に衣のむねを引ちがへ／＼ぞし給ひける(巻第二「教訓状」)

これは、平服で登場する重盛を最も印象的に描き出している場面である。一門の存亡にかかわる事件の最中、周囲の人々がことごとく武装しているにもかかわらず、烏帽子、直衣を着用して現れる重盛の姿が強調されている。重盛の平服の着用は、清盛に「世をへうする」ものと捉えられるが、武装して当然と思われる状況のなかであえて取った深意のある行動と考えられる。その行動には、平家という武門の中心に立つ身でありながら、父清盛の武断的なあり方と一線を画して戦いを拒絶する、断固とした決意と深い覚悟が現れている。対立と戦乱の続発を描いた『平家物語』において、武装せず平服の着用にこだわることは、衝突を避けようとする重盛の強い意志を表しており、これは、戦いの回避によって世の平穏を実現するための重盛にとっての重要な「戦い」であったと考えられる。『平家物語』は、対立や戦いを厭い、周囲との親和的な関係を尊ぶ重盛の心性を示すものとして、彼が武装しないことをくり返して語っているのである。

ところが、そのような強い造型意図をもってしても、『平家物語』は歴史上の事件を追うなかで、重盛が戦いの場に臨むことを書かざるを得なかった。巻第一に描かれる白山事件において、延暦寺の大衆が、後白河院の近臣で加賀国の目代の藤原師経に末寺を焼かれ

たことに憤慨し、強訴を起こして洛中に参入することが語られているが、その際、重盛が内裏の守護を命じられて、陣頭に立つことが記されている（巻第一「御輿振」）。重盛は、「源平両家の大將軍」のうちの一人として、三千余騎の軍勢を率いて登場する。他の平家の武将たちが、彼の弟や叔父と紹介されているように、重盛は平家を代表する総大将として語られている。これは、重盛がこの時点で武官の最高職である左大将（左近衛府の長官）に任ぜられていたことを踏まえた記述と考えられるが、不思議なことに、重盛は大將軍として名が挙げられるだけで、武装した姿や戦いぶりにはまったく触れられていない。この場面の記述にも諸本間の違いが見られるが、特に注目されるのは、延慶本における重盛の装束描写である。

其時平氏ノ大将ハ小松内大臣重盛公、俄事ナリケレバ、直衣ニ袖サシハサミテ、金作りノ大刀帯テ、連銭葦毛ノ馬ノ太ク逞マシキニ、黄伏輪ノ鞍置テゾ乗レケル。伊賀、伊勢両国ノ若党共三千余騎相具セラレタリ。東面ノ左衛門陣ヲ固メタリ

（延慶本・巻第一「山門衆徒内裏へ神輿振奉事」）
 ここには、「直衣ニ袖サシハサミ」戦いに臨む重盛が描かれているが、「俄事」という緊急の事態によることと説明されているものの非常に奇妙な記述となつて

いる。直衣は貴族の平服で、袴も男性の場合は束帯の下に着用するものであり、戦いの場で、このような平服のまま太刀を帯して騎乗するのは、非現実的で、滑稽にも思われる。「金作リノ大刀」、「太ク遅マシキ」馬、「黄伏輪ノ鞍」によって威厳を保つように計らってはいるものの、武官としての威厳を損ねかねない記述をしてまで「直衣ニ袴」という姿を描出するところに、鎧をまとう重盛を描こうとしない表現の志向の強さがうかがわれる。それほどに、重盛が武装しないことが重視されていると言つてよい。

他に、長門本でも、重盛は「にはかの事なりければ、直衣に矢おひて、こかねつくりの太刀はきて」という姿で戦いの場に臨んでいる（巻第二「日吉神輿入洛間頼政問答事」）。さらに、源平盛衰記に至っては、同じ場面に、重盛の名さえも記されていない（巻第四「山門御輿振」）。このように、『平家物語』の諸本は、重盛が武装して戦いの場に立つことに言及しないような記述を行なっている。方法こそ異なれ、重盛の武装を描くことを回避しようとする志向においては共通している。このような描き方は、『保元物語』『平治物語』で強調されていた重盛の戦闘意欲を徹底して消去するものであり、紛争が続く『平家物語』の世界において、対立を厭い、戦おうとしない特異な武人とし

て重盛を際立たせている。『保元物語』『平治物語』で描かれているような武人重盛像とはあえて異なる形で、『平家物語』が彼を造型したことの意味はきわめて大きい。次節では、重盛が戦わないことの意味を、対立の連続と秩序の動揺を描いた『平家物語』の前半の記述のなかで捉えていく。

三 自制する将軍としての平重盛

『平家物語』において、重盛は前述のように武装した姿で登場していないほか、武装することを悪と捉えてもいる。その捉え方を示す発言は、武装して後白河院を幽閉しようとする父清盛に対する諫言のなかで記されている。

太政大臣の官に至る人の、甲冑をよろふ事、礼義を背にあらざや。就中御出家の御身なり。夫三世の諸仏、解脱幢相の法衣をぬぎ捨て、忽に甲冑をよろひ、弓箭を帯しましまさむ事、内には既破戒無慙の罪をまねくのみならず、外には又仁義礼智信の法にもそむき候なんぞ（巻第二「教訓状」）

重盛は、太政大臣の官位に至った人物にして出家者である清盛が「甲冑をよろふ事」を、「礼義を背」いて「破戒」に当たる行為として痛烈に非難している。こ

の発言から読み取れるのは、たとえ武門平家の棟梁清盛であっても、状況や立場を考慮せず、軍事的な対立や殺戮などにかかわる武装という行為を、軽率に行うべきではないという認識である。もちろん、立ち向かう相手が王権を体現する後白河院であるからこそ清盛の行動を批判的に捉えているのであり、武装すること一般を否定してはいないが、『平家物語』が重盛の発言を通して戦おうとする意欲を問題視して、戦いを慎む姿勢を示していることは重要である。

『平家物語』にはこの場面以外でも武装することを否定する見方が現れており、法住寺合戦における明経博士清原親成の戦死を語る記述でもその死を「明行道の博士」が「甲冑をよろふ事」によって招いた結果であるとして批判している（巻第八「鼓判官」）。このように『平家物語』では、身分や立場に相応しない武装をすることに對する強い否定が現れており、そこには、武力行使の氾濫を忌避する態度がうかがわれる。

『平家物語』は、武装することを武人以外には許されない行為と捉えていると言ってよい。そのなかで、武門平家の嫡流にして近衛大将であるというところで武装してしかるべき重盛に、武装することを批判させ、平服の姿で登場させている。この重盛を武装させない記述のあり方は、「殊に大様げ」な重盛の姿を描き出すと

いうこと以上に重要な意味を持っている。

巻第二の「教訓状」等に現れる、平服の姿で父清盛を諫める重盛の言動は、それが描かれている場面の状況に即して、後白河院と清盛の対立関係のなかでその意味が捉えられてきたが、それだけではなく、『平家物語』がその序盤から、さまざまな対立と紛争を語っているという記述の展開のなかで、その言動の意味を捉え直す必要がある。たとえば、後白河院と清盛の対立が語られる前にも、二条院の葬儀の場に延暦寺と興福寺の対立が起こり、武装した興福寺の「悪僧」が長刀、太刀を持って現れ、延暦寺の額を切り落としている（巻第一「額打論」）。それに対して、後日、延暦寺の大衆が興福寺の末寺の清水寺に押し寄せて焼亡させるといふ事態にまで及ぶ（巻第一「清水寺炎上」）。そして、この事件は、平家一門も巻きこむことになり、延暦寺の大衆が清水寺に向かった時に、これは、後白河院の命令を受けて平家追討に向かったものであるという噂が立って、清盛がその噂を信じてさらに騒動は大きくなるうとする。そうしたなかで、重盛が冷静に清盛を宥めて後白河院との対立を抑止する行動をとり、事態を鎮めている。次に挙げるのは、この騒動で六波羅に身を寄せた後白河院を、騒動が収まった後に、重盛が御所まで送って帰ってきた時の記述であ

る。

重盛の卿御送りより帰られたりければ、父の大納言の給ひけるは、「扱も一院の御幸こそ、大に恐れおぼゆれ。かねても思食より仰らるゝ旨のあればこそ、かうは聞ゆらめ。それにもうちとけ給まじ」とのたまへば、重盛卿申されける、「此事ゆめ／＼御けしきにも、御詞にも出させ給べからず。人に心つけがほに、中／＼あしき御事也。それにつけても、叡慮に背給はで、人の為に御情をほどこさせましまさば、神明三宝加護あるべし。さらむにとっては、御身の恐れ候まじ」とて、立たれければ、「重盛卿は、ゆゝしく大様なるものかな」とぞ、父の卿ものたまひける（『清水寺炎上』）

ここでも、武士、檢非違使が大勢動員されている状況にありながら武装したとは語られていないなかで、重盛は、父清盛に向かって、後白河院との対立をもたらず「あしき御事」を避けて、「叡慮に背給は」ずに院に奉仕することを勧めている。重盛の言動に「ゆゝしく大様なるものかな」と感嘆する清盛の言葉も記されているように、重盛は清盛の警戒心を和らげて対立を未然に防いでいる。その姿は、相次ぐ対立と紛争を語っている物語の記述のなかで異彩を放っている。

この後、『平家物語』は、「平家の悪行のはじめ」に

して「世の乱れの根本」と位置づけている殿下乗合事件を語るが（巻第一「殿下乗合」）、平家と摂関家が敵対する事態のなかで重盛は以前と同様に、対立を回避する行動をとる。この事件では、はじめに、重盛の次男資盛が摂政藤原基房を駆け破ろうとしたことで恥辱を受けるが、それを知って基房への報復の意志を示す清盛に対して、重盛は、摂政に対して無礼を働いた資盛を「尾籠」であると厳しく非難し、事件の起因を我が子の過失と捉えて、怨みの連鎖、対立の激化を食い止めようとする⁽⁸⁾。このような『平家物語』の重盛の言動は既に多くの指摘があるように、九条兼実の『玉葉』や慈円の『愚管抄』の記述から、実際に基房への報復を行ったのは、清盛ではなく重盛であると考えられる。『平家物語』は、史実から大きく離れて基房への報復を実行した重盛を、清盛の武力行使を抑止する役に変えている。こうした改変は、対立や戦いに関与せず、それを回避する人物として一貫して重盛を造型しようとする表現の志向の強靱さをうかがわせる。

巻第一では、さらにこの後も、白山事件が取り上げられ、延暦寺と後白河院の近臣との対立、紛争が語られるなど、『平家物語』の記述は秩序の動揺、乱世の到来を表象するものとなっており、武装して戦う人々の姿も次々と描かれている。そうした記述は、敵対心、

闘争心による武力の行使を、秩序の乱れをもたらすものとくり返し捉えており、戦乱の勃発を平家の悪行によるものと解釈する叙述の枠組みの背後に、世の本質を鋭く捉える見方を取り込んでいる。『平家物語』が見出した世の理想は、ただ一人武装をせず戦おうとしない重盛の描出のうちに明確に現れている。作中の重盛の言動は世の乱れを回避するものとしてきわめて重要な意味を持つ。『平家物語』の重盛の言動には、乱世のなかでも秩序を保持し回復へと向かわせようという願いが込められている。重盛が武装をせずに、説得の言葉のみで清盛の悪行を抑止したと語るところには、その願いの本質が如実に現れている。

『平家物語』の重盛は武装せず、戦わない人物である。ただし、決して無力ではないことにも注目したい。むしろ、武人としてのすぐれた資質を具えているとさえ捉えられている。たとえば、以仁王と源頼政の挙兵を語る場面では、頼政の子、仲綱との対立を引き起こした平宗盛の思慮のなさが批判され、それと対照的な人物として重盛は讃えられているが、そのなかで、平然と長大な蛇を素手で捕らえる重盛の逸話が語られている（巻第四「競」）。重盛は、中宮徳子のもとを訪れた時に現れた、八尺もある蛇を恐れずに素手で押さえ、中宮が驚かないようそつと自分の直衣の袖に

入れて座を離れ、衛府の藏人であった源仲綱に渡している。この蛇を恐れぬ豪胆さは、仲綱にも、この後に登場する競の滝口にも見られるように、すぐれた武人が持つべき強さと捉えられている。この重盛の剛気さは、『保元物語』『平治物語』で描かれている、強敵にもひるむことのない武将重盛像にも通ずる。

また、巻第二「烽火之沙汰」の段では、重盛が軍兵を召集する場面が描かれているが、そこには、彼が軍勢を統率する能力を十分に具えていることが示されている。

主馬判官盛国を召して、「重盛こそ天下の大事を別して聞出したれ。我を我と思はん者共は、皆物ぐして馳参れと披露せよ」との給へば、此由披露す。「おぼろけにてはさはがせ給はぬ人の、かゝる披露のあるは、別の子細のあるにこそ」とて、皆物具して、我もくと馳参る。淀・はづかし・宇治・岡の屋・日野・勸修寺・醍醐・小黒栖・梅津・桂・大原・しづ原・せれうの里にあぶれるたる兵共、或鎧着ていまだ甲を着ぬもあり、或は矢おうていまだ弓を持たぬもあり。片鎧踏むや踏まずにてあはてさはいで馳参る。小松殿にさはぐ事ありと聞えしかば、西八条に数千騎ありける兵共、入道にかうとも申も入ず、ぎゞめきつれて、皆小松

殿へぞ馳たりける。すこしも弓箭に携る程の者一人も残らず

武士たちは、重盛のことを「おぼろけにてはさはがせ給はぬ人」として彼に對する強い信頼と敬意を抱いて、「皆物具して、我もくんと馳参る」というように、皆が重盛の召集に進んで応じることが記されている。集まった人々は洛外のさまざまなところからもあわて騒いで駆けつけたとされており、重盛の人望の高さを強調している。さらに、清盛の邸宅がある西八条の「数千騎ありける兵共」も、清盛に断りもなく重盛の許に集まったということまで語られている。重盛が清盛よりもはるかにすぐれた武門の棟梁としての資質と力量を持つことを表す記述である。このような記述のあり方は、『保元物語』『平治物語』の重盛の造型にも通ずるものである。

この場面でさらに注目されるのは、重盛が軍兵を召集した動機を語る記述である。この召集は、大勢の武士を動員する大規模な軍事行動ではあるが、「入道相国の謀反の心をもや、やはらげ給ふとの策也」と記されているように、戦いのための動員ではなく、戦いを望む清盛の闘争心を緩和するためのものと意味づけられている。このように、『平家物語』の重盛は武門の棟梁としての力量を潜在的に有していながら、その行使を

自制する人物として描かれている。『保元物語』『平治物語』における重盛像を踏まえつつ、その自制的な姿を描き出しているところに、『平家物語』の記述の特質が認められる。

『平家物語』における重盛は、「將軍」となるにふさわしい人物とされている。それを明示するのが、源頼朝に拳兵を勧める文覚の言葉である。

平家には小松の大臣殿こそ、心もかうに、ばかり事もすぐれておはせしか、平家の運命が末になるやらん、こぞの八月薨ぜられぬ。今は源平のなかに、わたの程將軍の相持ッたる人はなし。はやく謀反おこして、日本国従へ給へ（巻第五「福原院宣」）

ここで、重盛は剛胆で智謀に富んだすぐれた武人と讃えられ、頼朝と同じく「將軍の相を持ッたる人」と評されている。『平家物語』で重盛が「將軍」として行動することはないが、元來「將軍」となるにふさわしい人物とされることで、「將軍」としての力量を自制し、潜在させていたことが明らかにされる。中世の動乱期の現実を見つめ、武力がもたらす暴力と無秩序を強く忌避しながら、戦乱の終息に武力が必要であることを実感するなかで、『平家物語』は、潜在的な武力を具えながらもそれを行使しないことで平和を実現する理

想的な「将軍」として平重盛を描き出しているのである。

四 平重盛が示す秩序の理想

『平家物語』の重盛は、武装することなく、武力の行使を自制して平和をもたらす将軍として理想化されているが、重盛は物語の前半の巻第三で早くも姿を消しており、実際に戦乱の終息を実現する将軍ではない。そこで、理想的な将軍として重盛を造型していることの意味を考えるに当たっては、その理想化を通していかなる秩序が求められているのかを捉えることが重要になる。それを明らかにするためには、『平家物語』の記述のしくみを、重盛の存命を描いた前半部だけではなく、物語の全体のなかで検討する必要がある。

戦いを忌避し、常に対立の回避を図って自重する重盛は、紛争が続発する『平家物語』の世界では特異な存在であることは既に確認したが、彼の死後には、その特異なあり方を体現する人物は誰もいない。重盛は存命中くり返し、清盛を諫め、進んで対立を引き起こそうとするその行動を阻止しているが、清盛は諫められた時には一時的に自身の企図を断念するものの、重盛の思考の論理や倫理を受け入れたわけではなく、重盛

の死後に、新たな対立と紛争を引き起こしていく。

平家を打倒して秩序の再生を導いた源頼朝も、作中において重盛が示した理想的なあり方を継承していない。別稿で詳しく論じたように⁹⁾、頼朝は他者との対立や紛争を望まない側面が描き出されている一方で、物語の終盤では後白河院との対立や、平家の残党狩りを行う際の非情さも語られている。そのなかで特に注目すべきは、頼朝が重盛の子孫を次々と殺めていることである。重盛の嫡孫である六代はもちろんのこと、それ以外の重盛の子孫を滅ぼすことにも異常な執着を見せている(巻第十二「六代被斬」)。重盛の子孫を探し出すために、「小松殿の君達の、一人も二人もいき残り給ひたらんをば、たすけ奉るべし。其故は、池の禪尼の便として、頼朝を流罪に申なだめられしは、ひとへにかの内府の芳恩なり」という偽りの言葉まで語っている。重盛の子忠房は、その「はかりこと」に欺かれて鎌倉へ出頭するが、その忠房に対して、頼朝はさらに虚言を重ねて「すかし上せ」て斬首しているように、敵対が疑われる平家の人々を排除するのに手段を選ばない頼朝の冷酷さが描かれている。頼朝は心にもない重盛への報恩を語る際に、平治の乱で敗北して朝敵となりながら生き延びたのは「ひとへにかの内府の芳恩」によるものだと述べているが、その言葉は、源

氏の棟梁の嫡子でも許して救おうとした重盛の寛大さを浮かび上がらせてもいる。頼朝の助命にかかわった重盛の行動は『平治物語』が詳述するところでもあり、『平家物語』の頼朝の発言もそれを踏まえたものと考えられる。

ただ、『平治物語』では、重盛以上に、清盛の継母である池禅尼が頼朝の助命に尽力した人物として強調されている（一類本『平治物語』下「頼朝死罪を宥免せらるる事付けたり呉越戦ひの事」。重盛は、池禅尼に協力する言動を示しているものの、池禅尼と清盛の間に立って二人の意向を取り次ぐ役を担う側面が大きい。そのような事情も踏まえながら、『平家物語』は、頼朝に、池禅尼に対する深謝の言葉を語らせるとともに、平治の乱で命を長らえたことを「ひとへにかの内府の芳恩」によると述べさせ、重盛から受けた恩の重さをくり返し強調している。それによって、『平治物語』以上に重盛からの恩の大きさが強調される形になっている。しかし、それにもかかわらず、『平家物語』は、恩人、重盛の子を容赦なく殺害する酷薄な頼朝の行動を描いて、寛容な重盛との違いを浮き彫りにしている。このように、『平家物語』の頼朝は、対立を望まず、寛容で情深い重盛の理想的なあり方を受け継いでいない。

さらに、『平家物語』の頼朝は、重盛の実子であるものの藤原経宗の養子になっていた宗実までも殺害している。平家とは「異姓他人」になっている上に、「武芸の道をばうち捨て、文筆をのみたしなで」いた宗実さえ、頼朝は許そうとしない（巻第十二「六代被斬」。そのような頼朝が支える秩序を、『平家物語』は十全で理想的なものとは捉えていない。そもそも、頼朝が重盛の子孫に特別な執着を見せるのは、小松家が平家の嫡流であるだけでなく、重盛が自分に匹敵する將軍としての資質を持っていたことを意識していたからでもある。頼朝は、將軍重盛の子孫を自分の地位と権威を脅かす者として見なし、保身のために躊躇することなく殺害している。このような描写は、対立と戦いを望まないことで平和をもたらす將軍にふさわしいとされている重盛の理想性が頼朝に受け継がれていないことを示すとともに、理想的な平和が実現されないままに物語が閉じられることを意味している。理想的な平和が実現されないからこそ、重盛の理想性の重要さと希少さが際立つこととなり、『平家物語』における重盛がことさらに異彩を放ち続けることになるのである。

頼朝が重盛の示した理想的なあり方を受け継いでいないように、物語を通して秩序の中心にある後白河

院も、重盛の理想性とは隔たるところがある。『平家物語』の後白河院は対立、戦いを惹起する行動をたびたび見せ、源義仲に挑んで法住寺合戦を引き起こすことも記されている（巻第八「鼓判官」）。この事件については、後白河院が「しかるべき武士」を動員せず、「悪僧」や「むかへつぶて・いんち、いふかひなき辻冠者原・乞食法師ども」を集める形で戦闘に臨んだことが非難されている。こうした記述も示しているように、『平家物語』は進んで戦おうとすることを否定的に捉えている。また、「しかるべき武士」以外の者が戦いに交わり、武力の行使が無軌道に拡大する状況を深く忌避している。ただし、後白河院が直接に非難を浴びることは少なく、代わりに、これに続く記述では院側の軍勢の指揮を任された院近臣の平知康の言動が強く批判されている（巻第八「鼓判官」「法住寺合戦」）。このような知康の描かれ方や彼への評価を通して見て取れるのは、後白河院を中心とする秩序が、その周囲にいる悪臣の讒言によってかき乱されるといふ構図である。悪臣として秩序を揺るがすのは知康だけではなく、物語の前半においても、後白河院と清盛との対立を煽る西光や藤原成親などの人物が登場し、世の乱れを作り出すことに加担する姿が描かれている。

後白河院を対立や紛争の場へと導く驕慢な悪臣たち

と対照的に描かれているのが重盛である。その対比からわかるように、『平家物語』では重盛のような良臣に支えられた秩序の実現が求められている。ただし、帝王を補佐する良臣のあり方は、重盛が清盛を諫める時のような姿勢が望ましいとはされていない。物語には、後白河院を守護しようとする重盛の意志と行動は描かれていない。このことからもうかがわれるように、『平家物語』が求める良臣は、武力の行使はもとより、王の判断を惑わしかねない進言までも自制し、王の意思に順応して王を忠実に守護する存在である。この良臣にかかわる記述が示唆するように、『平家物語』は総じて、行動的ではない自制的な姿勢を評価し⁽¹⁰⁾、その姿勢を対立、戦乱を根本から防ぐものと捉えている。これは物語を一貫して支える論理であり、不和、対立を否定し、自重、自制を重んずるこの論理は、親和性を基調とするものと言ってよい。このような親和性こそが、『平家物語』における理想的な秩序を規定しているのである。

『平家物語』の後白河院は、先述のように、周囲の悪臣の讒言を聞き入れることで、対立や紛争に巻き込まれる王として描き出されている。一方で、高倉院は、無私無欲で苦しみを一身に引き受ける王として描かれることによって、「明王」とされている。このことにつ

おわりに

いては別稿で詳述していたが^(註)、無私無欲でいかなる対立も起こさうとしない高倉院の言動は、まさに親和性を理想的に体现している。

そして、「明王」高倉院について注目したいのは、「良臣」重盛と同じ場面で描かれていないことである。重盛が左大将、内大臣に任ぜられるのは高倉院の在位中だったことを鑑みれば、重盛が高倉院を支える重臣として描かれるのがむしろ自然である。そのような二人をあえて同時に描かないところに、『平家物語』における秩序というものの位相がうかがわれる。理想的な「明王」と「良臣」が共に現れば、平和が実現するはずだが、実際は戦乱が続発し広がっていく状況が語られていく。事実を変えない形で、理想が実現されないことを記述していく必要があるため、『平家物語』は高倉院と重盛を同時に描くことなく、「良臣」重盛がいなくなった後に、「明王」高倉院が登場するようなストーリーになっている。この二人は揃うことなく、それぞれに理想的な言動を示すなかで、『平家物語』における秩序の在り処は説き明かされている。それと同時に、戦乱の危機にさらされた現実のなかでは、無私無欲な明王と、自制して王を守護する将軍が揃う、という理想こそが平和を実現するということを、『平家物語』は語っているのである。

本稿では、重盛の武装した姿をいっさい描かないという『平家物語』の特徴的な記述に注目し、『保元物語』『平治物語』における重盛の描かれ方を参照しつつ、『平家物語』における重盛の人物造型の特異さとその意味を考えてきた。『平家物語』は、『保元物語』『平治物語』の恐れを知らない武人としての重盛像を受け継ぎつつも、そのすぐれた力量を潜在化する形で、重盛という人物を、対立を厭い、戦おうとする意志を持たない将軍として描き出している。世の乱れを記すなかで、潜在的な武力を具えながらもその行使を自制する重盛を、平和を実現する理想的な将軍として語り、また、その言動を通して理想的な秩序のあり方を提示している。『平家物語』が語る秩序の理想とは、自制的な将軍が無私無欲な明王を守護するという世の実現なのである。その理想は、理想のままで実現されないが、『平家物語』は確かな理想としてその記述のうちにこれを刻印している。

『平家物語』の重盛を通して見出せるのは、物語世界を貫く理想としての親和性の論理である。理想が実現されないままに、重盛が物語世界から姿を消した後に、親和性の論理は物語世界に大きく作用し、対立、

不和に対する忌避と否定を示す記述を次々と生み出してきている。その親和性の論理が、他の論理や志向といかにかかわり合って、『平家物語』の表現世界を形作っているかにも注目して、『平家物語』の表現のしくみをこれからさらに広く深く解明していきたい。

注

- (1) 永積安明『平家物語に関する基礎的覚え書』(『文学』第四卷第九号、一九三六年九月。後に『中世文学論』(日本評論社、一九四四年十一月)に再録)を参照。
- (2) 石母田正『平家物語』(岩波新書、一九五七年十一月)第一章「運命について」を参照。
- (3) 山下宏明『軍記物語の方法』(有精堂、一九八三年八月)第三章『平家物語』と物語論を参照。
- (4) 佐倉由泰『軍記物語の機構』(汲古書院、二〇一一年二月)第七章『平家物語』の機構(一)―多様性、拡散性を秩序化する機構―を参照。
- (5) 本稿の考察において、主な検討対象とする『平家物語』の諸本とテキストは次のとおりである。
 寛一本―新日本古典文学大系(岩波書店)、屋代本―『高野本屋代本対照平家物語』(新典社)、百二十句本―『斯道文庫古典叢刊之二 百二十句本平家物語』(汲古書院)、延慶本―『校訂 延慶本平家物語』(汲古書院)、長門本―『長門本平家物語』(勉誠出版)、源平盛衰記―巻第一―第四十二は、中世の文学(三弥井書店)、巻第四十三―第四十八は、『源平盛衰記慶長古活字版』(勉誠社)、四部合戦状本―『四部合戦状本 平家物語』(汲古書院)、源平闘諍録―講談社学術文庫『源平闘諍録上・下』
 また、本稿の考察で取り上げる、『平家物語』以外の書のテキストは次のとおりである。
- (6) 『保元物語』では、古態に近い一類本に比べて、四類本における重盛のほうがその剛胆さが強調されているほか、武装した姿等、戦場における重盛をめぐる描写がより詳細になっている。本文の生成過程において、重盛に対する関心が高まり、彼を美化する意図が作用していたからだろうか。『平治物語』の諸本における重盛をめぐる記述の相違にも、同様の傾向が見られる。
- (7) 『平治物語』の四類本では、一類本に比べて、道理に照らして清盛に反論する重盛の積極的な姿勢がより明確に看取れる。成立の経緯を考えると、四類本が『平家物語』の重盛像を取り入れ、自らの重盛像に変容をもたらした結果であろう。
- (8) この場面における重盛の言葉には「頼政・光基など申源氏共にあざむかれて候はんには、誠に一門の恥辱でも候べし」という源氏を意識した言及も認められ、そこには間違いなく源氏に対する強い対抗意識が現れており、

源平両家が朝家を守護するために「互にいましめをくはへ」あう（巻第一「二代后」という源平交代史観が反映されている。このような歴史観は、『平家物語』の表現に受け入れられ、対立を望まない人物として重盛を描こうとする『平家物語』の叙述の志向をやや後退させるものとなっている。こうした歴史観の受容ともかわるなかで、対立と戦いの回避に苦心する人物として重盛を描こうという造型意図が形作られたということは、留意していく必要がある。この問題については、「付記」に挙げた研究発表の機会における、佐伯真一氏の質問と意見に重要な示唆をいただいた。

(9) 小稿『平家物語』における秩序の形成―後白河院と源頼朝の關係に着目して―（『文化』第八一巻第一・二号、二〇一七年九月）では、後白河院と頼朝の關係を捉えながら、作中における秩序の形成について論じた。

(10) 重盛に関して、その自制的な姿勢は、武装せず戦わないことのみならず、作者の思想を代弁したものとされている。儒仏の道理を語った彼の言葉にも現れている。たとえば、鹿の谷事件をめぐる記述に見られる、清盛に後白河院の幽閉を思いとどまるよう諫める彼の言葉は、その好例として挙げられる。

其故は、重盛叙爵より、今大臣の大将にいたるまで、併君の御恩ならずと云事なし。其恩の重き事を思へば、千顆万顆の玉にも超え、其恩の深き事を案ずれば、一入再入の紅にも猶過たらん。しかれば、院中に参りこもり候べし。其儀にて候はば、重盛が身にかはり、命にかはらんと契つたる侍共、少々候らん。これらを召しぐして、院御所法住寺殿を守護

しまいらせ候はば、さすが以外の御大事でこそ候はんずらめ。悲哉君の御ために奉公の忠をいたさんとすれば、迷慮八万の頂より猶たかき父の恩忽に忘れんとす。痛哉不孝の罪をのがれんと思へば、君の御ために既不忠の逆臣となりぬべし。進退惟谷れり。是非いかにも弁がたし。申うくるところ、詮はた、重盛が頸を召され候へ（巻第二「烽火之沙汰」）

ここには「良臣」と「孝子」の倫理の板ばさみになって苦悩する重盛の姿が現れており、その姿は、武装せず、戦わないことで対立を回避しようとする重盛のあり方に通ずるものがある。

(11) 小稿『平家物語』における不和と親和―後白河院、高倉院をめぐる關係に着目して―（『日本文芸論叢』第二五号、二〇一六年三月）では、後白河院と高倉院を中心とした天皇家の人々の關係に注目し、その關係性に現れた親和性の意義と重要性について論じた。

〔付記〕

本稿は、中世文学会第二二七回大会（於東北大学、二〇一九年一〇月二七日）における同題の研究発表の原稿をもとにして、これに加筆、修正を行って成稿したものである。

Taira no Shigemori in *the Tale of the Heike*: A Warrior whose Description Lacks Arms and Armor

Le YU

Taira no Shigemori has been considered a key character in *the Tale of the Heike*, whose words reflect the ideology of the writer and foreshadow the fall of the Heike Family. However, most research focuses solely on his words expressed in the work. In contrary to those, this article explores the descriptions of him unequipped with arms and armor, even on the verge of battle. Analyzing these descriptions, it becomes clear what the work considers ideal political and social order.

The descriptions of Shigemori in *the Tale of the Heike* contradict those in *the Tale of the Hōgen Rebellion* and *the Tale of the Heiji Rebellion*, which portray Shigemori as a bellicose warrior and describes in detail how he fights in battles. On the other hand, in *the Tale of the Heike*, he is portrayed as potentially mighty and competent as a general, despite his strong unwillingness to exert his military power. Within the work, it can be observed that his self-restraint is considered extremely important to avoid wars and makes him the ideal general of the time.

This article also proposes that the descriptions of his ideal ways as a general play a significant role in the whole work. Despite that, his death is written in the third volume and then he is barely mentioned again. He is the only one among the main characters who is described with a strong will for self-restraint and constantly making efforts to resolve conflicts and strife. With his potential military power and abstinence, Shigemori is suggested in the work to be a qualified general capable of supporting the emperor's governance. Although Shigemori has never been described together with the exemplary emperor Takakura, the separate descriptions of the two indicate the possibility to achieve fair and honorable governance when a competent general and an exceptional emperor cooperate. This cooperation ultimately leads to the ideal political and social order the writer of the work seeks.